

2025 年度事業報告書

(2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日)

公益財団法人サントリー文化財団

< 事業の概要 >

当財団は 1979 年の設立以来、社会と文化に関する国際的、学際的な研究の発展と有能な人材の育成を目的に事業活動を行ってきた。2010 年の公益財団法人移行に際し、これら事業を「学芸文化振興事業」と「地域文化振興事業」の 2 つの公益目的事業に再編した。現在、学芸文化振興事業では研究助成（公募）、研究助成（推薦）、調査研究、サントリー学芸賞、海外出版助成の 5 つの事業を、地域文化振興事業ではサントリー地域文化賞、地域文化活動支援の 2 つの事業をそれぞれ実施している。

当年度は、学芸文化振興事業の「研究助成（公募）」では 45 件に対し総額 4,473 万円、「研究助成（推薦）」では 11 件に対し総額 2,190 万円の助成を決定した。「調査研究」では、山崎正和記念基金も活用しながら研究会等を開催し、成果の公表も行った。「サントリー学芸賞」では 8 人に賞を贈呈し、「海外出版助成」では 10 件に対し総額 702 万円の助成を決定した。

地域文化振興事業においては、「サントリー地域文化賞」で 5 件の活動に賞を贈呈し、「地域文化活動支援」として映像をウェブサイトに掲載し活動の紹介に務めた。

各事業において当財団が重きを置く対面での知の交流を実施することができた。

< 学芸文化振興事業 >（公益目的事業 1）

1. 研究助成（公募）

広く一般より公募する研究助成事業で、2 つの助成プログラムを実施。本年度はあわせて 45 研究に対し総額 4,473 万円を助成した。

① 研究助成「学問の未来を拓く」

人文学、社会科学の分野において、従来の「研究」や「学問」を問い直す知的冒険に満ちたグループ研究活動に対する助成である。本年度は 2025 年 2 月から 4 月の募集期間に 553 件の申請があり、次の 30 研究に対し総額 3,000 万円の助成を 8 月に実施した。1 月から 2 月にかけて中間報告会を 5 回に分けて開催し、助成対象者から研究の進捗報告を受けたのち、専門の枠を超えた研究者同士の意見交換が行われた。

No.	研究テーマ	助成対象者（代表）
1	日本におけるクリスマスオーナメント誕生の背景と 3DCAD データによる復元の研究	相澤 孝司 (流通科学大学人間社会学部 非常勤講師)
2	日本におけるバーレスク通史の構築:上演空間と踊り手／観客の力学の変容	泉 沙織 (東京科学大学大学院環境・社会理工学院 博士後期課程)

3	共生社会の心のインフラを問う —— 在日ベトナム人の視点にみる認知的不協和と価値観	上里 彰仁 (国際医療福祉大学基礎医学研究センター 教授)
4	能舞台をサウンドスケープ(音風景)の視点からひも解く	上田 麻理 (神奈川工科大学情報学部 准教授)
5	「旧東独」の35年間で「小さな物語」から捉え直す — メディア・まちづくり・学術・アート	大谷 悠 (福山市立大学都市経営学部 准教授)
6	近現代日本のポップカルチャーにおけるヴィラン表象についての研究	大橋 崇行 (成蹊大学文学部 教授)
7	歌舞伎町に「棲む」若年女性はどこから来てどこに行くのか — 「流入」→「居留」→「退出」の構造と背景	奥貫 妃文 (昭和女子大学人間社会学部 教授)
8	20世紀日本の「開拓」をめぐる文化史的研究 —— 思想・表象・記憶の継承の検討を通して	奥村 華子 (日本学術振興会特別研究員PD (受入機関: 山形大学人文社会科学部))
9	アイヌの声を届ける法学を目指して — 司法・立法・法学に潜む植民地主義の批判的考察	小坂田 裕子 (中央大学大学院法務研究科 教授)
10	女性画家アルテミジアの見た世界:アニメーション制作を通じた西洋近世美術の再構築	川合 真木子 (千葉大学大学院人文科学研究科 准教授)
11	動物音声研究の黎明期の音古画像から失われた動物音声を蘇生し音遺産を未来へ継承する試み	香田 啓貴 (東京大学大学院総合文化研究科 准教授)
12	人類史におけるモニュメント・都市・貨幣の脱権力化: 国家に抗する社会をめぐる人文科学知の総合に向けて	小茄子川 歩 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 特任准教授)
13	人質の提供から大使の提供へ —— 近代在外公館制度の起源	小浜 祥子 (北海道大学大学院公共政策学連携研究部 准教授)
14	戦争伝承の集合的記憶形成における言語・スタンス・認知: 次世代との共感性構築にむけて (国際共同研究)	崎田 智子 (同志社大学グローバル地域文化学部 教授)
15	日本語で何をどう話せば面白くなるのか?: 言語文化・話し方・キャラを踏まえた総合的な「面白い話」研究	定延 利之 (京都大学大学院文学研究科 教授)
16	退屈の機能的意義を問い直す	品川 和志 (国立精神・神経医療研究センター神経研究所 外来研究員)
17	ジャポニスムと中東:エジプト近代宮殿所蔵の幕末明治遣欧使節団贈答品・日本品の悉皆調査	ジラルデッリ 青木 美由紀 (イスタンブール工科大学建築学部 准教授補)
18	「食」と「教育」を基軸としたコミュニティ協同組合論の構築: 世代と国境を越えた日韓共同研究による試み	杉本 貴志 (関西大学商学部 教授)
19	芸能史叙述における「性」と「差別」 — 配慮・検閲・自己規制 —	鈴木 聖子 (大阪大学大学院人文学研究科 准教授)

20	解釈労働をめぐる権力関係についてのフェミニスト人類学的研究	田川 夢乃 (和光大学現代人間学部 講師)
21	中世城郭遺構に集中分布する薬用植物テンナンショウの実態と薬種流通	種坂 英次 (近畿大学農学部 教授)
22	制度の外側から秩序を再構築する —— 霊性・宗教・アジア主義の交差点を掘り起こす	莊 千慧 (神戸女子大学文学部 准教授)
23	日韓併合期における大衆文化としての朝鮮歌謡の形成と内地の受容について	長澤 雅春 (佐賀女子短期大学地域みらい学科 教授)
24	養育里親と里子の家族形成プロセスに関する質的研究 複線径路等至性アプローチによる分析	新居田 佳祐 (東京大学大学院医学系研究科 修士課程)
25	東南アジアの移民労働力はなぜ枯渇しないのか：STAIR STEP MIGRATION の実証的研究	深川 博史 (東海大学文理融合学部 教授)
26	能楽の時間進行・相互行為を可視化・立体化する	藤田 隆則 (京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 教授)
27	グローバルな経済的正義とグローバルヘルス：社会的公共財（コモンズ）概念に根差した学際的研究	村上 仁 (国立健康危機管理研究機構国際医療協力局 人材開発部長)
28	アジアのアール・ブリュットに対する国際比較研究：人類の財産として共有するために	森岡 優紀 (国際日本文化研究センター研究部 機関研究員)
29	中国農村部の生きた民間信仰の継承と再構築：巫女・道士・占い師に着目して	閻 美芳 (龍谷大学社会学部 専任講師)
30	国際法体系の基底論理の再検討	若狭 彰室 (東京経済大学現代法学部 准教授)

(助成額合計 30,000,000 円)

(助成対象者の肩書は助成申請時のもの)

② 「若手研究者のためのチャレンジ研究助成」

人文学、社会科学の分野において、学問的に新しい視点を持ち、社会的にも広がりのある研究を志す、意欲的な若手研究者の支援を目的とする助成である。専門領域からの飛躍を目指す若手研究者の研究を対象とし、その積極的なチャレンジをサポートする。助成期間中に助成対象者が異分野の識者に対して研究報告を行う場を設け、助言を得るとともに、学際的視野を広げ相互研鑽する場を提供している。

本年度は10月から11月の募集期間に277件の申請があり、次の15研究に対し総額1,473万円の助成を2月に決定した。また、前年度(2024年度)の助成対象者の中間報告会を12月に開催したほか、前々年度(2023年度)助成対象者の研究成果報告書を10月に発行した。

No.	研究テーマ	助成対象者
1	対内的脅威と国境紛争の回避—国境画定の効果に関する理論構築と実証	新子 泰平 (東京大学大学院総合文化研究科 博士後期課程)
2	19 世紀後半におけるウクライナ・イメージの展開—ロシア・ウクライナ両国の写実主義風景画を比較しながら	井伊 裕子 (東京外国語大学総合文化研究所 研究員)
3	開発途上国における産業発展・貧困削減・大気汚染緩和: アフリカ都市の自動車修理セクターにおける事例から	岡崎 慎治 (ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス経済学部 博士課程)
4	中世ヨーロッパにおける大聖堂建設と経済成長	久保 昌弘 (クレルモン・オーヴェルニュ大学国際開発研究センター(CERDI) 博士研究員)
5	大喰の系譜と現代的現れ—「ドカ食い」は単なる流行か	佐野 太紀 (東京大学大学院総合文化研究科 博士後期課程)
6	生理用品をめぐる知と無知の技術史:近代日本におけるフェムテック前史の解明	孫 詩彧 (国際日本文化研究センター研究部 助教)
7	近代化する錦絵についてのイメージ人類学的考察—絵はがきと手彩色写真に注目して	高橋 百華 (九州大学大学院芸術工学府 博士後期課程)
8	文字中心のコミュニケーションはどこまでいけるか:聴覚障害者の情報アクセシビリティ向上に向けて	西村 綾夏 (国立障害者リハビリテーションセンター研究所感覚機能系障害研究部 流動研究員)
9	1880 年代-1930 年代中央ユーラシア境界地域における人の国家への所属をめぐる問題と秩序変容	松尾 健司 (東京大学大学院総合文化研究科 博士後期課程)
10	イランにおけるイスラーム的「バイオエシックス」の展開:臓器移植の合法化と実践	丸岡 輝 (一橋大学大学院社会学研究科 博士後期課程)
11	ソヴィエト人から多民族ロシア・ネーションへ: V. A. ティシコフの思想にみる国民統合論の変遷	三栖 大明 (北海道大学大学院文学院 博士後期課程)
12	中央アジアに刻まれた日本人抑留者の記憶—戦後史の境界を歩く	村山 颯 (カリフォルニア大学サンタバーバラ校歴史学部 博士課程)
13	ポスト社会主義時代のチェコ人形劇にみる新たな「人間」像の構築	山中 海瑠 (名古屋大学大学院人文学研究科 博士後期課程)
14	不可視化された居住分離—都市住宅構造にみる移民のマイクロ・セグリゲーション	梁 昊 (コーネル大学社会学部 博士課程)
15	1970~80 年代のニューレフト子ども論の考察—消費社会における新たな子ども像の探究に着目して—	渡邊 真之 (お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系 助教)

(助成額合計 14,730,000 円)

(助成対象者の肩書は助成申請時のもの)

2. 研究助成（推薦）

有識者からの推薦に基づいて行う研究助成事業である。日本に在住する将来有望な新進の研究者による学術上意義の大きい人文学、社会科学分野の研究に対して助成を行う。日本国籍を有する、もしくは日本語を母語とする若手研究者を対象とする「若手研究者による社会と文化に関する個人研究助成（鳥井フェローシップ）」と、日本への留学生で日本以外の国籍を有する若手研究者を対象とする「外国人若手研究者による社会と文化に関する個人研究助成（サントリーフェローシップ）」の2つのプログラムを実施している。本年度は次の11研究に対し総額2,190万円の助成を2月に決定したほか、前年度（2024年度）に助成対象となった両フェローの合同中間報告会を10月に開催し、専門や国籍の枠を超えた研究者同士の意見交換が行われた。なお、②は当財団初代理事長の佐治敬三氏の遺志を活かして設立した“佐治記念基金”を活用して実施した。

①「若手研究者による社会と文化に関する個人研究助成（鳥井フェローシップ）」

No.	研究テーマ	助成対象者
1	ポストトゥルース時代における政治・行政不信：日本の公的機関は人々にどのように認識されるのか	井坂 圭吾 (神戸大学大学院法学研究科 博士課程後期課程)
2	ポストコロニアリズムの視点からみる日本とインドネシアにおける翻訳の歴史	岡田 莉子 (東京外国語大学大学院総合国際学研究科 博士後期課程)
3	14世紀初頭における信仰・神学・学知—トマス・アクィナス解釈を巡る視点から	上遠野 翔 (東京大学大学院総合文化研究科 博士後期課程)
4	「財団」と戦後日本の知識人——米国の文化外交戦略から東アジアの学知へ	田中 駿介 (東京大学大学院総合文化研究科 博士後期課程)
5	ヴァーツラフ・ハヴェルの戯曲における言語の機能	豊島 美波 (東京大学大学院人文社会系研究科 博士課程)
6	「負い目」をめぐる現代倫理の再定位——反差別思想史における〈無責任〉の系譜へ	山口 和紀 (立命館大学大学院先端総合学術研究科 一貫制博士課程)

(助成決定額合計 14,400,000円)

(助成対象者の肩書は助成申請時のもの)

②「外国人若手研究者による社会と文化に関する個人研究助成（サントリーフェローシップ）」

No.	研究テーマ	助成対象者
1	近世長崎における来船清人の絵画制作及びその南画への影響	王 紫沁 (国際日本文化研究センター研究部 博士研究員)
2	表記の詩学：越境文学の人名表記における文字選択の表現効果を認知科学とデジタル人文学から検討する	テイバー ジェイムソン (東京大学大学院人文社会系研究科 博士課程)
3	近代天皇制における軍事・政治・ジェンダーの交差構造——貞明皇后の軍事的役割を中心に	頼 宇韓 (名古屋大学大学院人文学研究科 博士後期課程)
4	「分衆」から運動主体へ——インターネット時代の日本イメージと東アジアにおけるポピュリズム的社会動員	李 宗泰 (クリス) (大阪大学大学院言語文化研究科 博士後期課程)

5 戦前期「間島」地方の医療事業に関する研究	劉 影 (総合研究大学院大学文化科学研究科 博士後期課程)
------------------------	-------------------------------------

(助成決定額合計 7,500,000 円)

(助成対象者の肩書は助成申請時のもの)

3. 調査研究

社会と文化に関する国際的・学際的な調査研究について、今日の時代に則したテーマを選定し、研究者・資金等の方策を決定し、当財団の下で実施するプログラムで、日本社会をはじめ世界に対して有意義な知見の発信を目指す。本年度の実施内容は以下の通りである。なお、⑥～⑩は当財団設立時より財団運営にご尽力いただき 2020 年 8 月に逝去された、前副理事長の山崎正和氏からのご遺贈を元に設立した“山崎正和記念基金”を活用して実施した。

① 「仮想日本外交史」(バーチャルヒストリー) (2024 年度より継続)

これまで暗黙裡に語られてきた「歴史の if (仮想歴史)」について、近代日本外交史を題材に正面から検討を行う。重大な歴史的局面での選択の意義と異なる可能性を改めて問い直し、ともすれば窮屈になりがちな学術研究に一石を投じる試み。本年度は研究会を 3 回行った。

主査：五百旗頭 薫 (東京大学教授)

② 「信用の人類史」(2020 年度より継続)

バブル崩壊、リーマンショック、暗号資産といった現代社会を騒がしてきたさまざまな金融現象を通して「信用」を見つめ直す。経済学だけでなく、人類学、歴史学、社会学、政治学、法学、文学の学際的な知見を総動員し、信用および金融の未来を見据える視座を手に入れることを最終的な目標とする。本年度は成果書籍出版に向けての執筆を進めた。

主査：齊藤 誠 (國學院大學教授)

③ 「グローバル時代の総合的イメージ」(2020 年度より継続)

視覚を中心とするイメージが氾濫する現代社会において、「イメージとは何か」という問題意識を共有しつつ、多様な分野の研究者や、芸術家などの実践者と議論を交わす。本年度は成果報告のシンポジウム「異分野の共鳴、イメージの交差点」を東京で開催した。

主査：三浦 篤 (大原美術館館長)

④ 「21 世紀社会における象徴と皇室」(2020 年度より継続)

歴史上「象徴」として重要な役割を果たしてきた君主・王室が、今後の社会においてどのような役割を果たしうるか、政治学・歴史学・文化人類学・社会学・思想史学など多方面からの知見を交錯させながら研究を進め、そのなかで日本の皇室の歴史を振り返り、制度についても検討する。本年度は成果書籍出版に向けての執筆を進めた。

主査：苅部 直 (東京大学教授)

⑤ 「堂島サロン」(2017 年度より継続)

人文学、社会科学系学問の存在意義が問われる中、悠久の知の面白さを共有し、知的交流の楽しさを社会に伝えることを目的に、産業界やマスコミからのゲストも交えて、人社系学問の知の有り様を広く議論する。本年度はサロンを 4 回開催し、内 3 回の要旨を当財団ウェブサイトに掲載した。

主査：猪木 武徳（大阪大学名誉教授）

⑥「グローバルな文脈での日本（フェーズ2）」（2025年度より新規）

山崎正和記念基金による事業。近年、日本人にも見落とされていた日本の魅力が世界で評価されつつある。そのような強みやポテンシャルに焦点をあてることによって、西洋中心主義的な価値観に揺らぎが生じている中での新たなパラダイムの視座を探る。本年度は本格始動に向けて、テレビ、出版、機関等を含む多様なステークホルダーとの打ち合わせを6回行った。

主査：渡辺 靖（慶應義塾大学教授）

⑦「山崎正和アーカイブ」（2023年度より継続）

山崎正和記念基金による事業。山崎正和氏が遺した資料・書籍類を、将来の学術研究に資するよう整理・記録・管理を行う。本年度は閲覧プラットフォームの一部公開ならびに、資料等の分類および目録作成等を行った。

⑧「『知海を泳ぐ』研究会」（鷺田塾）（2023年度より継続）

山崎正和記念基金による事業。山崎正和氏の遺志を継いで、若手研究者の育成を目的とする。関東（赤坂教室）と関西（堂島教室）でそれぞれ研究会を運営し、若手研究者に学びの機会を提供する。本年度は関西、関東でそれぞれ2回ずつの研究会と、東西合同での合宿およびエクスカージョンを行い、異分野間の交流や専門研究を広く社会に問いかける重要性について議論を行った。昨年度より2年間行った第一期を終えた。

塾長：鷺田 清一（大阪大学名誉教授）

赤坂教室：御厨 貴（東京大学名誉教授）、村井 良太（駒澤大学教授）

堂島教室：猪木 武徳（大阪大学名誉教授）、佐藤 卓己（上智大学教授）

⑨「山崎記念研究会」（2023年度より継続）

山崎正和記念基金による事業。本年度はメンバーによる研究会を2回と合宿を行い、2026年度は「社交」をテーマとして、4人のメンバーがホストとなって社交の場を実際につくり出す研究会とすることを決定した。

ホスト：橋本 麻里（学芸プロデューサー）

古田 徹也（東京大学准教授）

本田 晃子（岡山大学教授）

前田 亮介（東京大学准教授）

⑩「山崎正和シンポジウム」（2025年度）

山崎正和記念基金による事業。当財団設立時より財団運営にご尽力いただき、2020年8月に逝去された山崎正和氏の没後5年イベントとして、シンポジウム「山崎正和とは『何』だったのか？」を東京で開催した。当日の要旨は「山崎正和アーカイブ」に掲載した。

⑪「アステイオン」での情報発信

人文学、社会科学の分野に関し日本社会をはじめ世界に対し有意義な知見を発信するため、論壇誌『アステイオン』（CEメディアハウス）を2回発行し、それぞれの発行記念トークイベントを東京、京都で行った。情報発信の強化を目的に運営している「WEB アステイオン」では71本の記事を掲載した。

4. サントリー学芸賞

政治・経済、芸術・文学、社会・風俗、および思想・歴史の各分野において、活動顕著な新進の研究者、評論家等の独創的、冒険的な業績に対して「サントリー学芸賞」を贈呈する。本年度の受賞者および対象作品は次の通り。贈呈式は12月8日に開催し、各受賞者に300万円の賞金を贈呈した。

部 門	受賞者	受賞対象作
政治・経済	近藤 絢子 (東京大学社会科学研究所教授)	『就職氷河期世代 —— データで読み解く所得・家族形成・格差』(中央公論新社)
	鶴岡 路人 (慶應義塾大学総合政策学部教授)	『模索する NATO —— 米欧同盟の実像』(千倉書房) および『はじめての戦争と平和』(筑摩書房)
芸術・文学	荒井 裕樹 (二松學舎大学文学部教授)	『無意味なんかじゃない自分 —— ハンセン病作家・北條民雄を読む』(講談社)
	細川 瑠璃 (東京大学大学院総合文化研究科准教授)	『フロレンスキイ論』(水声社)
社会・風俗	鈴木 昂太 (国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授)	『比婆荒神神楽の社会史 —— 歴史のなかの神楽太夫』(法藏館)
	松永 智子 (東京経済大学コミュニケーション学部准教授)	『米原昶の革命 —— 不実な政治か貞淑なメディアか』(創元社)
思想・歴史	鶴見 太郎 (東京大学大学院総合文化研究科准教授)	『ユダヤ人の歴史 —— 古代の興亡から離散、ホロコースト、シオニズムまで』(中央公論新社)を中心として
	師田 史子 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教)	『日々賭けをする人々 —— フィリピン闘鶏と数字くじの意味世界』(慶應義塾大学出版会)

(受賞者の肩書は受賞時のもの)

5. 海外出版助成

海外における日本理解の促進を目的に、日本語で書かれた優れた研究業績、または日本について書かれた書籍の外国語への翻訳および外国語での出版に対して助成する。本年度は10件の出版事業に対し総額702万円の助成を3月に決定した。

No.	申請図書	言語	出版社(国)
1	『グローバル・バリューチェーンの地政学』 猪俣 哲史(著)	英語	ブルッキングス研究所出版局 (アメリカ)
2	『Held in Transition: Japan's Karafuto Residents Under Soviet Rule on Sakhalin Island, 1945-1949. Words, Objects, Images』 Marie Sevela(著)	英語	バレンシア大学出版局 (スペイン)

3	『Parallax Memory, Performative Recollection: War Memory in Contemporary Japanese Video Art』 Ayelet Zohar (著)	英語	カリフォルニア大学東アジア研究所 (アメリカ)
4	『「維新革命」への道—「文明」を求めた19 世紀日本』 荻部 直 (著)	韓国語	Beanshelf 出版 (韓国)
5	『杉浦康平と写植の時代—光学技術と日本語の デザイン』 阿部 卓也 (著)	中国語	江蘇鳳凰美術出版社 (中国)
6	『中国と台湾—危機と均衡の政治学』 松田 康博 (著)	中国語	国立台湾大学出版センター (台湾)
7	『特命全権大使 米欧回覧実記 第一編』 久米 邦武 (編)	アラビア語	Odabaa 2000 出版・流通 (エジプト)
8	『定本 日本近代文学の起源』 柄谷 行人 (著)	スペイン語	協同組合 Radical Books (Verso Libros) (スペイン)
9	『哲学論文集 第二』 西田 幾多郎 (著)	フランス語	Mimésis 出版 (イタリア)
10	『囚人と狂気—19世紀フランスの監獄、文 学、社会』 梅澤 礼 (著)	フランス語	ライン&ドナウ大学出版局 (フランス)

(助成決定額合計 7,020,000 円)

< 地域文化振興事業 > (公益目的事業 2)

1. サントリー地域文化賞

地域文化の発展に貢献した団体・個人に対して「サントリー地域文化賞」を贈呈する。本年度の受賞者は次の通り。贈呈式は10月20日に開催し、各受賞者に300万円の賞金を贈呈した。

受賞者	活動の内容
岩手県北上市 「北上ミュージックコーラス隊」	学校・学年の枠を超えた「地域の部活動」として、広く歌声を届ける
石川県輪島市 「御陣乗太鼓保存会」	地域に深く根付き、住民の誇りと希望であり続ける郷土芸能を継承
福岡県福岡市 「BOOKUOKA」	街を舞台にした多彩な企画で本の魅力を伝えるブックフェスティバル
熊本県天草市 「コレジヨの仲間」	古楽器演奏を通じ南蛮文化が開いた時代の音と歴史を地域内外に発信
大分県大分市 「大分圏清掃整理促進運動会」	毎月10日のトイレ清掃パフォーマンスで地域の日常とアートをつなげる

2. 地域文化活動支援

地域で文化活動を行う団体・個人を支援することを目的に、こうした活動に有益な情報を発信し、各地の地域文化に関する活動の相互交流と啓発の場を提供する。毎年、サントリー地域文化賞受賞者の活動を紹介する映像を制作し、当財団のウェブサイトに掲載するとともに、YouTubeにも掲載している。また、英語字幕をつけた映像も制作し、専用 YouTube チャンネルで日本の地域文化の魅力を海外に向けてより広く伝えている。本年度は日本語 14 件、英語 13 件を制作した。

以 上